

◎今週の御言葉 「子どもを腕に抱きよせて」(マルコの福音書 9 章30～37節) 「だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです。また、だれでも、わたしを受け入れるならば、わたしを受け入れるのではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです」(9:37) 仲森文穂

○イエス様は人々を癒し、また教える日々でした。でも今はそのような心境でなかったようです。なぜなら、受難予告を聞いた弟子たちの心境を思っておられたからです。他方、弟子たちは受難予告を聞いたけれど訳が分からず、もっと詳しく聞きたいけれど、もし主の受難が事実となれば、自分たちの未来はお先真っ暗、それを思うと、怖くて尋ねられなかったようです。

さて、イエス様に「道で何を論じ合っていたのですか」と尋ねられた時、彼らは黙っていました。「だれが一番偉いか」と論じ合っていたからです。およそ教会では話題にならない話です。弟子たちは互いに「自分が一番偉い」と主張し合っていたのでしょうか。それとも皆で「一番は誰だろう」と詮索し合っていたのでしょうか。こういう議論は、自信がある人にとっては結構楽しかったりします。でも自分に自信のない人は、悔しい思いをすることになってしまいます。こんな議論、福音の香りがするのでしょうか。しないはずです。そんな会話をイエス様が望まれるはずがありません。

○イエス様は、弟子たちに「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなものしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい」と教えられました。イエス様が求めるのは、仕えること、下から支えることです。家中で出かける時、ガスはしめたか、鍵はかけたか、と最後まで残って見回る人が必要です。同様に、教会において、強い人も弱い人も一緒に生きられるよう、心を配る人が必要です。そんな人が多ければ多い程、その交わりは豊かになるのです。

その後、イエス様はひとりの幼子を真ん中に立たせ、腕に抱き寄せ、「だれでも、このような幼子たちのひとりを、わたしの名のゆえに受け入れるならば、わたしを受け入れるのです」と言われました。大人は幼子を小さく、弱いからダメだなんて思わず、そのままだ姿を受け入れます。そのように、大人同士もお互いに小さく弱さを、イエス様の名によって受け入れ合うことが求められています。

イエス様は私たちを欠けも咎もあるまま、受け入れてくださいます。このイエス様の名を信じ、私たちも人を排除する心が砕かれ、欠けも弱さも互いに受け入れ合うことができるよう、祈っていこうではありませんか。